

## 編集後記

近年かまびすしく取り沙汰されてきた21世紀がやってきました。時代の流れにもまれながらも本誌がふたつの世紀にまたがって発行され続けたということはご同慶の至りであります。21世紀は外科医にとってどういう100年になるのでしょうか。外科の技術的なものは20世紀に出尽くしてしまうかのように次々と開発されました。しかしどうやら人類の叡智はとどまるところを知りません。100年後などとても想像つきませんが、人口が極端に減少した日本では一人でも多くの人を助けようと、外科医はコンピューターやロボットを駆使して手術のようなことをしているのでしょうか？

本誌が30年足らずの間に我が国を代表する学会誌として高く評価され、さらに次なる世紀につなげることが出来たのは歴代の編集委員長、担当理事の熱意があったればこそと思われまふ。

多くの執筆者が英文誌への投稿を望む傾向のなかで、和文誌としてグレードを保っていくために多くの編集委員の熱意と努力が続き込まれてきました。査読は各人が毎月10編近くの論文を分担しながらも丁寧にそして指導的な態度で行われております。委員全員が集まって毎月行われてきた編集会議は極めて真摯なものであり、執筆者に対しては温かい配慮がなされております。本年から査読の方法が変更され、より充実するはずですが、会誌の編集についての委員会のポリシーは変わることなく受け継がれていきます。筆者は、和文誌として最も高い質を保ち、我が国消化器外科の水準を反映し、外科医の教育の場を提供することなどが本誌の目標とするところと心得て努力しております。編集委員の方々が丁寧な査読をされることを良いことにして、十分推敲されたとは思われない原稿を投稿してくる不屈きものが時々あるのは残念なことです。指導者が居られる場合は是非1度は目を通して下さるようお願いいたします。

編集委員がいかに努力をしようと、会員の皆さんが良い論文を投稿してくださらない限り本誌の充実をはかることは出来ません。若い柔軟な思考に立脚した斬新な研究、積み重ねられた臨床経験から得られる示唆に富んだ情報などを積極的に論文にしていだきたいと考えています。

(小柳泰久)